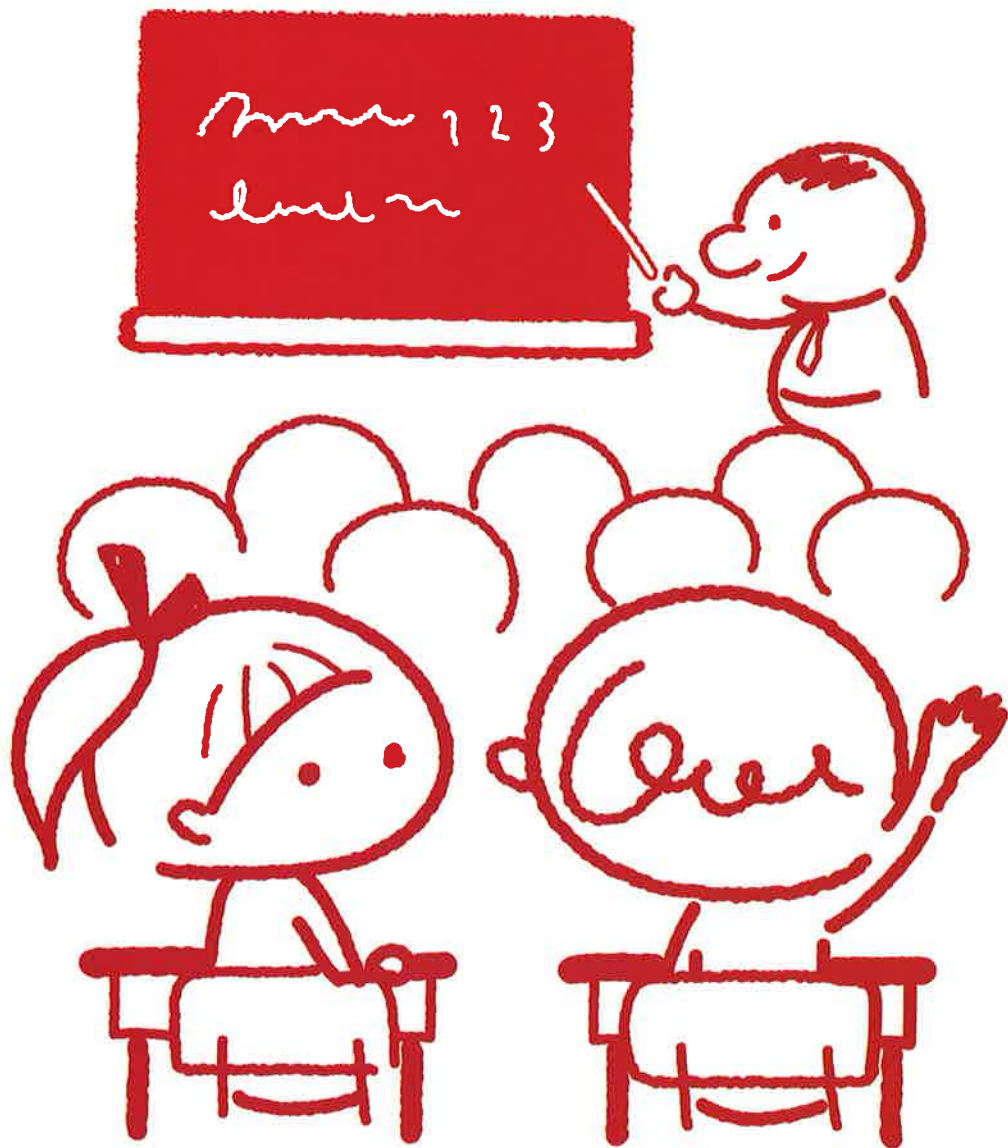
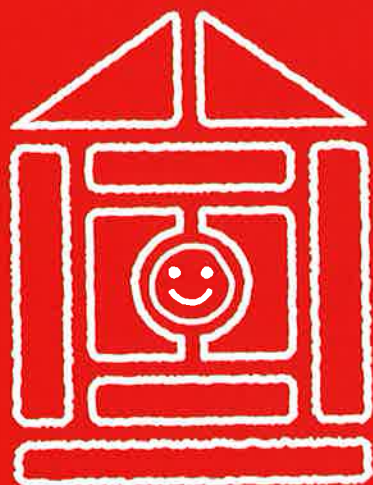




子どもみんな プロジェクト

ハンドブック 2020





ハンドブックの使い方

このハンドブックは、文部科学省委託事業「子どもみんなプロジェクト」の成果を現場にわかりやすく届けることを目的としています。

より詳しく知りたい人は、「子どもみんなプロジェクト報告書」をご覧ください。それぞれを担当する大学にお問い合わせください。

もくじ

Contents

section 1

子どもみんなプロジェクトのわけ	pg.04
いじめ、不登校、暴力行為が減らない	pg.04
忙しい先生たち	pg.04
文科省の動き	pg.05
子どもみんなプロジェクトの始まり	pg.05

section 2

学校風土を変えよう!	pg.06
学校風土って何だ?	pg.06
物差しを作ってみた	pg.07
関連がわかった	pg.08
学校風土向上大作戦	pg.09

section 3

「勇者の旅」で不安への対処力を養う	pg.10
こころの健康づくりは“不安”の問題の予防から	pg.10
不安と上手につきあう力を育む「勇者の旅」プログラム	pg.11
「勇者の旅」を実施した学級の不安スコアが下がる	pg.12
先生や子どもたちから「不安とのつき合い方がわかった」との声	pg.12

column

エビデンス(科学的根拠)とは何か?	pg.13
-------------------	-------

section 4

子どものこころをよく見てみよう	pg.14
不登校やいじめ、子どもの自殺とこころの健康	pg.14
こんな子どもが心配	pg.14
子どものこころを把握すると良いことが起こる	pg.15

section 5

子どものこころを続けてみていくとわかっていくことがある	pg.16
問題を予防する方法を見つけるためのコホート研究	pg.16
不登校は勉強が不得意な子に起こりやすい?	pg.16
抑うつ、攻撃性も不登校に関係がある?	pg.17
ストレスマネジメントが大切	pg.18
子どもみんなプロジェクトの可能性	pg.19

01
section

子どもみんなプロジェクトのわけ

子どもみんなプロジェクト事務局

いじめ、不登校、暴力行為が減らない

文部科学省が毎年行っている「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上諸課題に関する調査」によると、この10年間、いじめ、不登校、暴力行為など、子どもの行動にかかわる問題は減ることがありません。なぜでしょうか？(図1-A、1-B)

もしかしたら、今、行っている様々な対策には、効果が少ないか、限定的であるのかもしれませんが。

暴力行為発生率の推移 (1000人当たり)

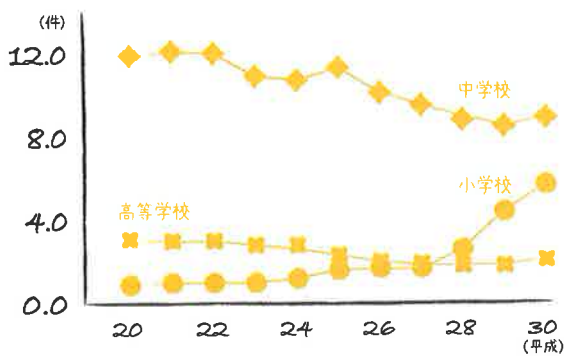


図1-A：暴力行為の推移

いじめの発生率・不登校児童生徒の割合の推移 (1000人当たり)

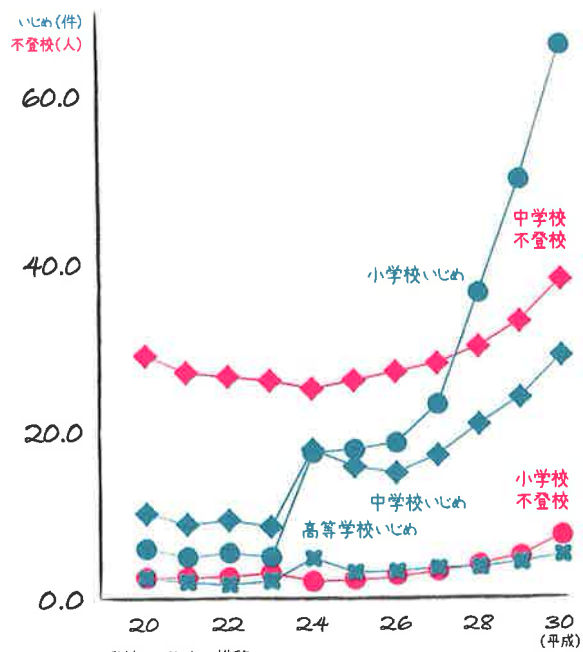


図1-B：不登校、いじめの推移

忙しい先生たち

先生たちの忙しさについて、たくさんの指摘があります。教員養成ルネッサンス・HATOプロジェクトによる「教員の仕事と意識に関する調査」(2016)では、教師の平日の仕事量は、11時間半から12時間に及び、特に授業以外の子どもへの指導、事務業務が長い様子です。

また文部科学省(2011)では、教師のうつ病が多いこと、精神疾患を理由にした休職の問題などが報告されています。よって、子どもたちの様々な課題について、先生たちにさらなる努力を求めるのは酷のように思えます。(図2)

さて、この状況に、私たちは何をすべきなのでしょう。

精神疾患による休職者

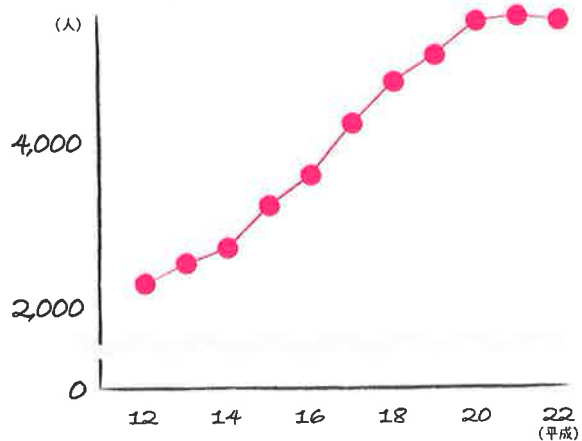


図2：先生たちのうつのグラフ

【文部科学省での動き】

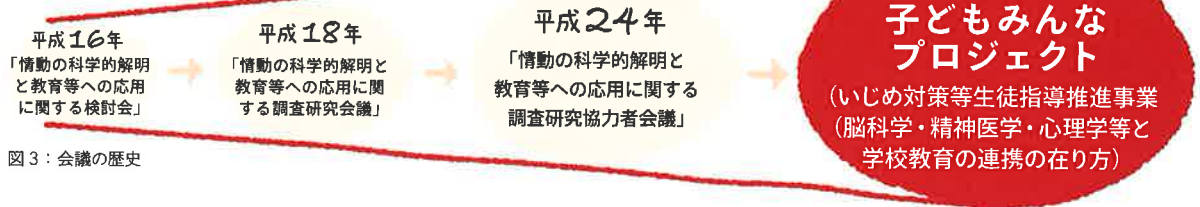


図3：会議の歴史

文科省の動き

平成16年、文部科学省は、その前年の「脳科学と教育」の検討成果を受けて、当時、話題になっていた子どもの突発的な攻撃性（いわゆる『キレる』言動）や反社会的行動への対応について最先端の脳科学等の知見を集めて検討することを目的に「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」を設置しました。それは平成24年以降の「情動の科学的解明と教育等への応用に関する調査研究協力者会議」に引き継がれます。(図3)

こうした会議では、子どもたちを継続的に見守ることの重要性、様々な領域で行われている情動に関する研究成果に関わる情報を集約することの必要性が主張され、さらには領域の異なる研究者間、研究者

平成19年4月、情動の科学的解明と教育等への応用に関する調査研究会議報告書

平成26年7月、情動の科学的解明と教育への応用に関する調査研究協力者会議審議のまとめ

【一貫して主張されていること】

- 子どもたちを継続的に見守る追跡研究の重要性
- 様々な領域で行われている情動に関する研究成果に係る情報を集約することの必要性
- 領域の異なる研究者間、研究者と教育関係者間等における情報交換等を円滑に行うことができる連携体制構築の必要性

と教育関係者間等における情報交換等を円滑に行うことができる連携体制(プラットフォーム)構築が必要であるとされました。

こうした動きの結果、平成27年度から、文部科学省委託事業「子どもみんなプロジェクト」が始まったのです。

子どもみんなプロジェクトの始まり

子どもみんなプロジェクトの目的は、教育の現場に科学を持ち込むことです。

もちろんこれまでも教育現場で科学的な取り組み、研究がなされていたことでしょう。しかし不登校、いじめ、子どもの暴力などの現状は、それが十分でないことを指し示しています。

子どもみんなプロジェクトは、教育現場と研究者の協働を実現し、全ての子どもたちの発達を支援することを目的とします。



図4：全ての子どものためであること。よって全ての教師、全ての大人の参画を目指すこと

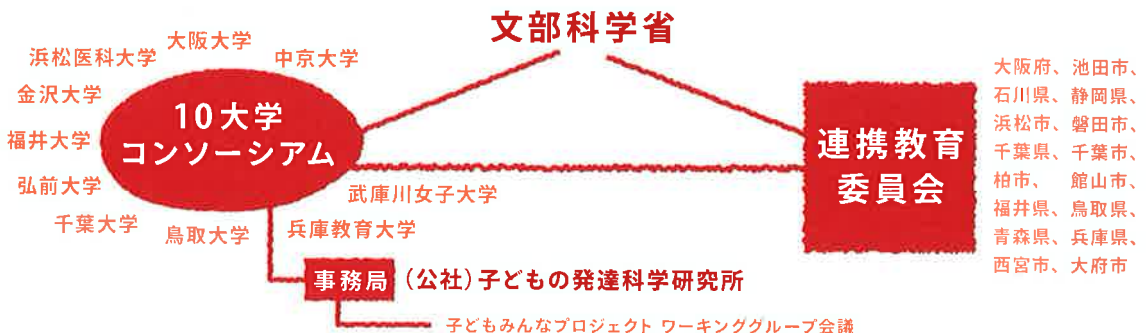


図5：組織図

02
section

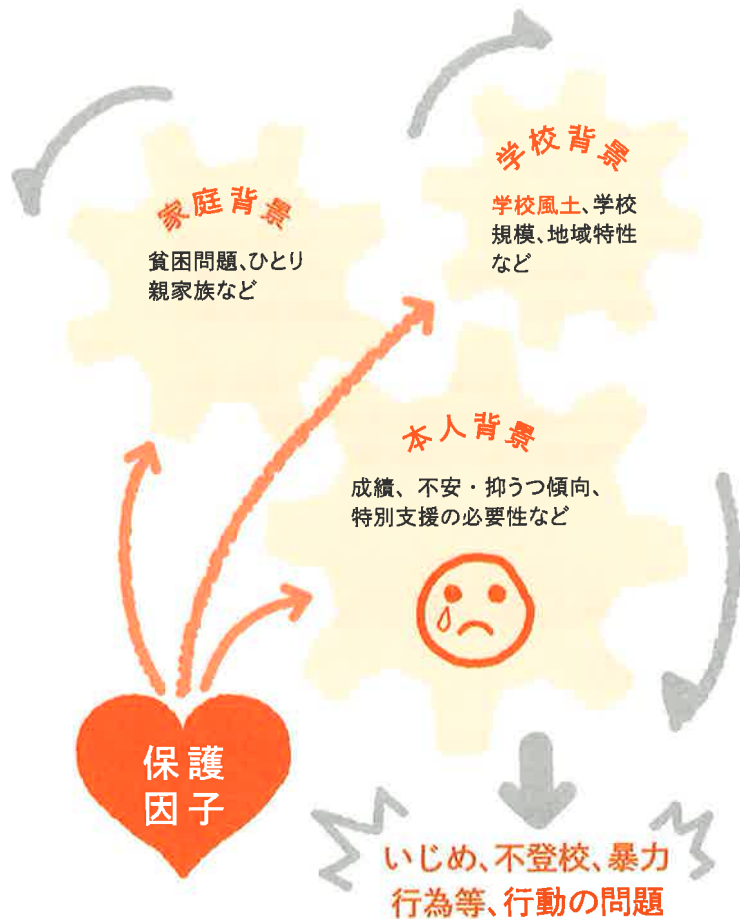
学校風土を変えよう!

大阪大学、浜松医科大学、(公社)子どもの発達科学研究所

学校風土って何だ?

子どもたちは学校環境の影響を受けます。良い雰囲気の良い学校だと、子どもたちは気分良く登校し、学習に取り組めますが、そうでなければ、様々なストレスを受けることでしょう。

学校風土とは、学校環境そのものが持つ雰囲気を言います。これまでの研究から、学校風土が子どもたちの行動、学力に影響があることがわかっています。つまり、学校風土を向上させることにより、いじめ、不登校、暴力などを予防したり、学力を向上したりできる可能性が高いことがわかっています。



保護因子(学校風土の良さ、親子関係の良さ、良い友人関係など)はリスクを下げ、問題を予防する。



Cohen et al. (2009) による

図1: 学校風土の向上(学校風土とは、「教師と児童生徒の学校生活での経験パターンからくるもので、学校の決まり、目標、価値観、人間関係、授業実践、組織体などに影響を与えるもの」である。)

物差しを作ってみた

不登校、いじめ、子どもの暴力などの問題を予防するためには、学校風土が大切だとわかってきたのですが、その学校風土をよくするためには、まず学校風土を科学的に正確に測らなければなりません。ダイエットするとき、まず体重計に乗ってみなければならぬことと似ています。

特に学校風土は、それぞれの学校が持つ全体的な雰囲気のようなものです。人によって違って見える危険もあります。

ところが、日本には学校風土を正確に測ることができる尺度が存在しませんでした。

そこで私たちは、諸外国において用いられている3つの学校風土尺度 (Inventory of School Climate-Student; The School Climate Measure; Delaware School Climate Survey-Student)、日本国内で用いられている質問紙調査(全国学力・学習状況調査児童・生徒質問紙、国立政策教育研究所; 学校生活・環境多面的調査、福岡県いじめ防止プログラム)などをもとに、日本学校風土尺度を開発することにしました。

できあがったのは、日本学校風土尺度 (Japan School Climate Inventory: JaSC 通称ジャスクです) で、32項目の質問でできていて、小学校4年生以上で使うことができます。※1

※1: JaSCは、申請することにより無料で使うことができます。詳しくは子どもみんなプロジェクトHPをご覧ください。 www.kodomo-minna.jp/
 ※2: 学校風土の4側面は諸外国の尺度とCohen et al. (2009)による分類に基づきます。

学校風土 4側面 ※2

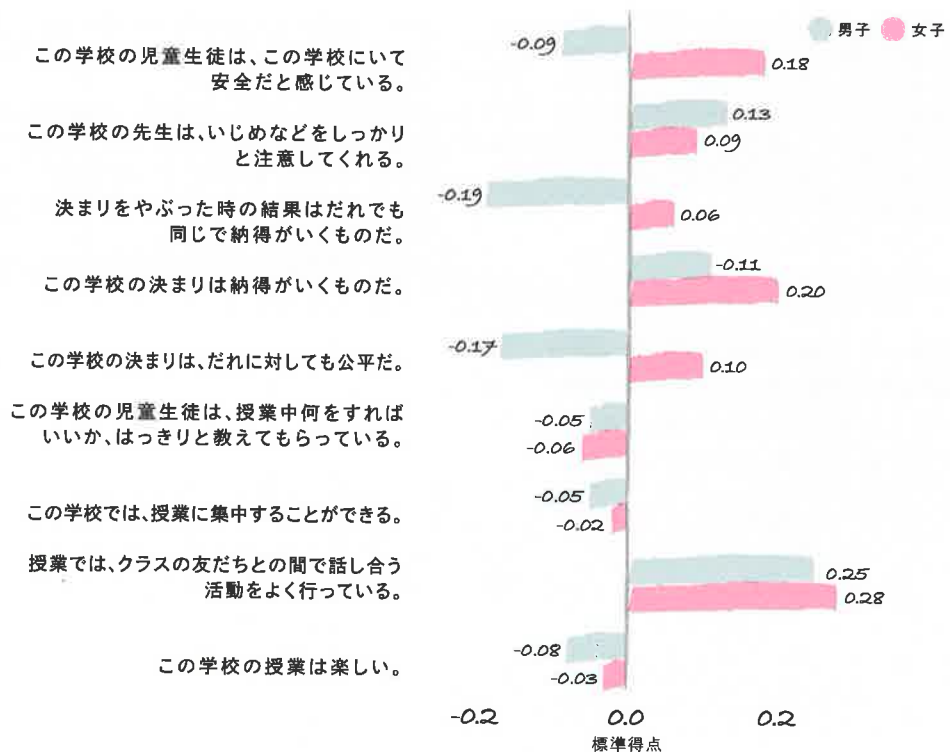
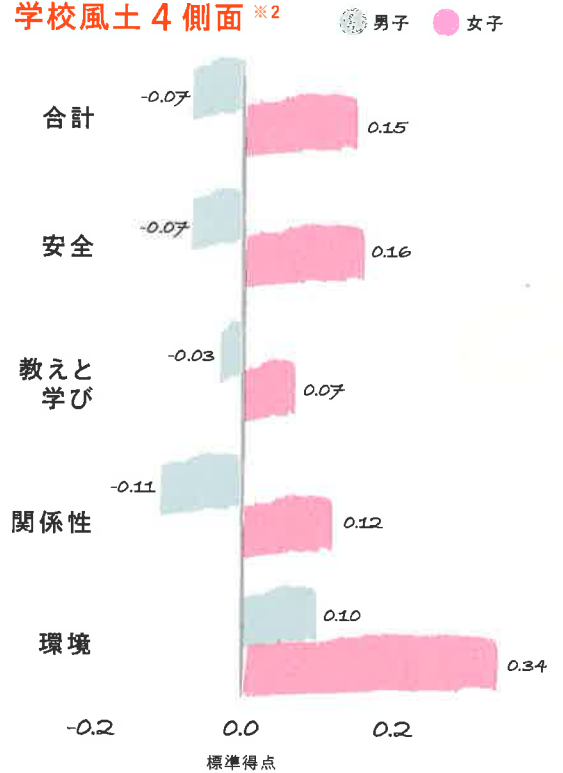


図2: 学校風土調査の結果報告書の例

関連がわかった

学校風土は、本当にいじめや不登校と関連しているのでしょうか？
平成28年度に小中学校8校（小学校5校、中学校3校、児童生徒数1,128名）の協力を得て、いじめと登校不安定に関連する要因を調査してみました。その結果は、表1の通りです。

表1：いじめへの関与、登校不安定に関連する因子

因子	いじめ被害	いじめ加害	被害・加害	登校不安定
日本以外の国籍または言語	2.62*	2.19	3.89*	3.04*
不安・抑うつ	1.95*	1.31	2.35*	1.17
インターネット使用(時間)	1.09	1.16	1.23*, [¶]	1.31*, [¶]
発達障がい診断または疑い	1.94*	1.12	1.52	2.79*
SDQ 行為 (high need)	1.23	1.62	1.74*, [¶]	3.21*
SDQ 多動 (high need)	1.57*	1.07	1.15	3.97*
SDQ 情緒 (high need)	1.96*	1.17	1.82	2.85*
SDQ 仲間関係 (high need)	2.01*	1.17	1.31	1.36

※ いじめについては日本いじめ尺度 (JaiS) を用いて測定し、いじめへの関与について被害のみ、加害のみ、被害・加害の3つのサブタイプに分類し、関与のない児童生徒と比較した。登校不安定については、調査前2ヶ月間の出欠について学校から情報提供を受け、欠席3日、遅刻・早退それぞれ2日以上(95パーセントイル値以上)のいずれかに該当する場合を登校不安定群として、それ以外の児童生徒と比較した。いじめへの関与、登校不安定それぞれに関連する因子について解析した結果を表1に示す。

※ 表中の数値はオッズ比を示す。*は統計的有意差がみられたもの(有意水準0.05)、[¶]は学校風土に対する感じ方で統制した場合に統計的有意差がみられなくなったものを示す。

※ 不安・抑うつは子どものための簡易うつ不安尺度 (BDASC) にて測定されたスコア(標準値)。発達障がいは自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、知的障がいのいずれかの診断を受けている、または疑いを指摘されているケース。SDQはStrength and Difficulty Questionnaire保護者評定版にてhigh needに分類されたケース。

※ 解析では児童生徒の性別、学年、保護者の世帯年収を考慮した。

いじめにも不登校(ここでは登校不安定)にも学校風土が関連しています。特別支援の必要性も関連があることがわかってきます。

この結果から考えると、学校風土の向上、特別支援教育の充実がいじめや不登校を予防する可能性が高いことがわかりますね。

学校風土向上大作戦

どうやら学校風土を良くすることは、多くの問題を予防するだけでなく、学力の向上にも効果があるようです。では、どうやって学校風土をよくすればいいのでしょうか？

実は欧米諸外国には、『学校風土向上プログラム』が既に開発され、効果を上げています。

しかし、それをそのまま日本で行うことは、教員研修に必要な時間や、実際に行う授業の時数を確保することなどの問題で難しいようでした。

そこで、日本の学校でも実践可能な『学校風土向上プログラム』の開発を行うことにしました。

実践例1：磐田市教育委員会

一つの中学校区での実践。

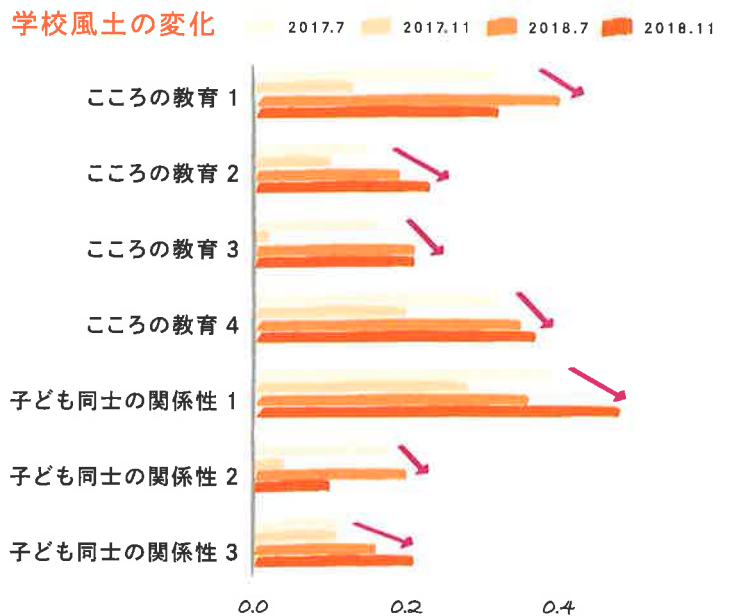
学校風土や子どもの情動発達に関する研修を行った後、全ての先生と以下のことを共有した。

- ・ありがとうで学校を変える：「ありがとう」をはじめとする挨拶を重視する。
- ・深呼吸で世界が変わる：深呼吸をはじめとするストレス軽減や感情コントロールの方法を教える。

・Aスタイルで共感が生まれる：Aスタイルとは、話し合いの方法。学習におけるスキルを共有することにより、授業参加と子ども同士の関係性を促進する（AスタイルのAは中学校区の名称）

結果：学校風土の「こころの教育」「子ども同士の関係性」が向上した。（右図参照）

学校風土の変化



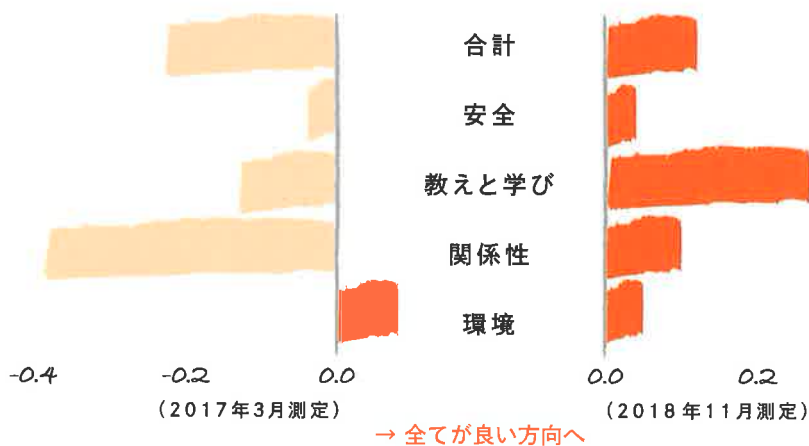
実践例2：浜松市教育委員会

学校風土に問題のある中学校のある学年をターゲットにした。

- ・子ども同士、子どもと教師、子どもと学校の関係性を良くするために、生徒主導の活動を行事等に設定した。特に当該学年が3年生になったときには、生徒会主催の行事（昼休みドッジビー大会、ハッピーサークル）を行ったり体育大会において3年生が主導できる活動（全校ソーラン節リーダー、応援）を増やしたりした。

- ・こころの教育の充実を図るために、「感情コントロールの方法」について全てのクラス（当該学年だけでなく）で授業を行うと共に、「問題解決の方法」について全校集会での指導を行った。

結果：対象学年の学校風土は以下の通りに変化した。



03
section

「勇者の旅」で不安への対処力を養う

千葉大学

こころの健康づくりは“不安” の問題の予防から

学校現場では、学校不適応、不登校、いじめ、自殺などが大きな課題となっていますが、これらの問題は“不安”という感情と密接に関わっていると考えられるケースが多くあります。文部科学省が教員を対象に毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」をみても、不登校児童生徒が不登校となったきっかけとして、「本人に係る要因」のうち「不安の傾向がある」が最も多い

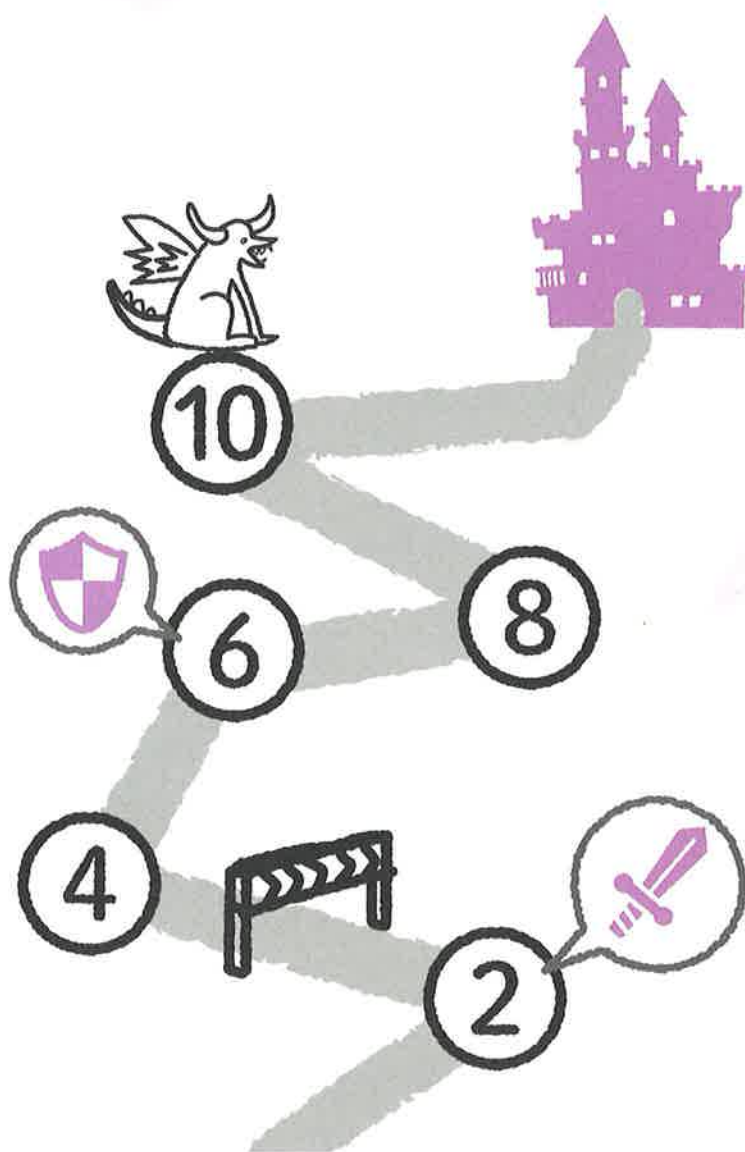
と考えられている状況にあります（平成30年度）。また、子どもの不安の問題は、放置すると慢性化する他、うつ病などの危険因子になるともいわれています。これらのことから、こころの病気の予防や学校現場における生徒指導上の課題解決には、不安の問題に焦点化した予防的アプローチを行うことが大切と考えられます。



不安と上手に つきあう力を育む 「勇者の旅」 プログラム

千葉大学子どもこころの発達教育研究センターでは、認知行動療法の考え方をを用いて不安と上手につきあっていく方法を学び、不安の問題を予防するためのプログラム「勇者の旅」を、2013年に開発しました。予備的研究において、プログラムの有効性も確認しています。

このプログラムは、小学校高学年～中学校の児童生徒を対象とする、1回45～50分×全10回の予防教育プログラムです。授業中、子ども達は各自がワークブックに書き込みをしながら、自分自身の不安の問題を解決する方法を考えたり、実際に行動したりすることを通して、不安への対処力を身につけていきます。「勇者の旅」のワークブックは、子ども達1人1人が勇者となって、不安の問題に立ち向かいながら『勇者城』を目指して旅をする、というストーリー仕立てになっており、不安の問題への対処法を楽しく学習できる内容となっています。

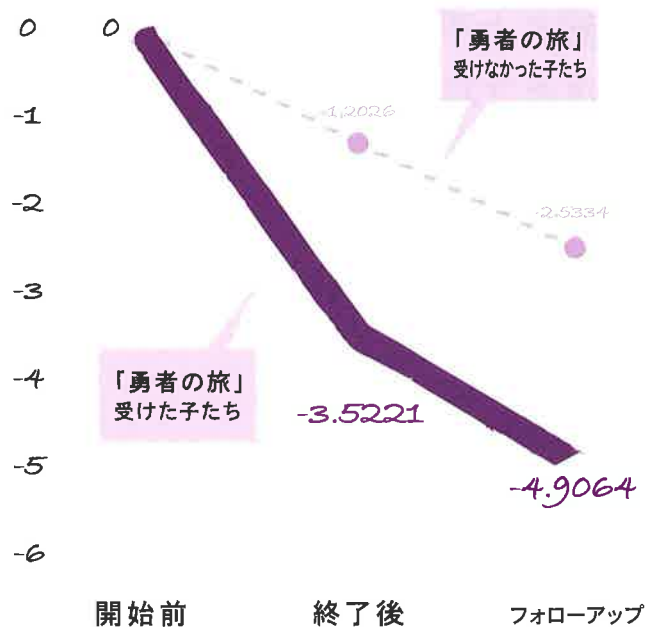


認知行動療法の 効果は研究で 立証されている

認知行動療法は、認知（考え）と行動のパターンを見直すことにより、不安や抑うつなどの感情をコントロールすることを目指す心理療法のことで、その効果がこれまでの研究で立証され、医療機関等で実施されています。また近年、認知行動療法に基づく不安の問題の予防教育プログラムが国内外で開発されており、学校現場でも効果があることがわかっています。

「勇者の旅」を 実施した学級の 不安スコアが下がる

平成29年度に「子どもみんなプロジェクト」を通じて協力校を募集し、小学校27校の協力を得てプログラムの効果を検証しました。プログラムの開始前、終了後、フォローアップ（1～3ヶ月後）の計3回、子どもの不安を測定する質問紙（ス Pens 児童不安尺度：SCAS）による調査を行ったところ、プログラムを実施した学級は、実施しなかった学級に比べて不安の点数が有意に低減し、プログラムの効果を確認することができました(Urao et al., in preparation)。

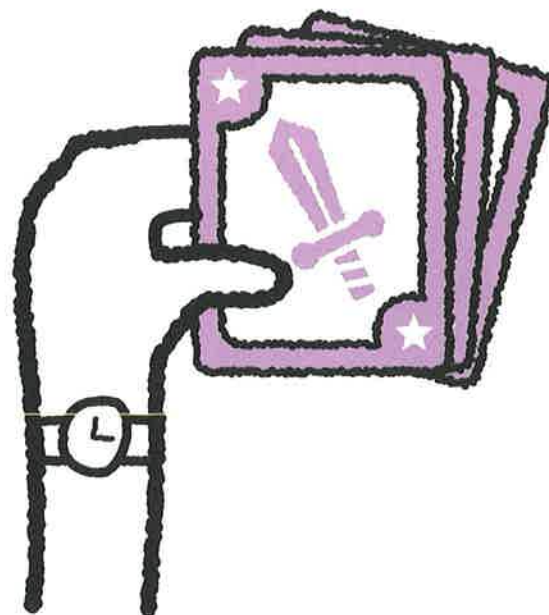


Time	群	推定値	標準誤差	95% 信頼区間		群間差の推定値	群間差の 95% 信頼区間		P-value
終了後	非介入	-1.2026	0.4992	-2.1860	-0.2192	2.3195	1.3827	3.2562	<.0001
	介入	-3.5221	0.5092	-4.5252	-2.5189				
フォローアップ	非介入	-2.5334	0.5025	-3.5233	-1.5435	2.373	1.4158	3.3301	
	介入	-4.9064	0.5110	-5.9130	-3.8998				

図3: プログラム実施前後のSCASスコアの変化

先生や子どもたちから「不安とのつき合い方がわかった」との声

実際にこのプログラムを実施した学校の先生は、「これまで不安は嫌だね、という認識で学習を進めてきたが、この『勇者の旅』で学ぶ中で、『不安』は必要悪のような存在で、うまくつきあっていくことが重要だと気づくことができた」などの感想をいただいています。また、子どもたちからも「最初、とってもこわかったことが、今では怖くなくなったことがすごい」「災害等が起きたとき『また同じことが…』と心配になってとても怖いときがあったが、『それはたまたま浮かんた考えだ』と〈勇者の考え〉を見つけ、安心することができた」のように、具体的に役立ったという声を数多くいただいています。





エビデンス(科学的根拠)とは何か?

コラム

最近、教育現場でも「エビデンス(科学的根拠)」という言葉が聞かれるようになりました。しかし、エビデンスとは何か、と言われると、答えられない方も多いのではないのでしょうか。

では、早速、エビデンス(科学的根拠)とは何か、について考えてみましょう。

まず、ここでの『科学』は、『再現性』を意味します。つまり、「一定の条件下において、あることが起こる確率が高い(偶然とは言えない)」となります。

例えば、喫煙が健康に良くないことは誰でも知っていますね。

ここでは、喫煙と不健康に因果関係(つまり、喫煙すると健康を害するという関係)があることを意味しています。そして、このことにはエビデンスがあります。

つまり、「喫煙する」→「不健康になる」には、偶然ではない関連があって、喫煙すると不健康になるということの再現性が確保されています。もちろんこれは確率の問題であって、喫煙すると100%、不健康になることを意味しませんし、喫煙しなければ100%不健康にならないことも保障していません。

このハンドブックでは、いくつかの関連についてのエビデンスを提供しています。

これらは、科学的に正しいとされている方法でデータを収集し、統計学を用いて解析しています。よって、このハンドブックで示されていることは、科学的根拠として捉えることが可能なのですが、「喫煙すると絶対に(100%)不健康になるよ」のような極端に考えることはふさわしくありません。

これらは、あくまでも研究の結果、そうした傾向が統計的に証明されたということですし、研究の対象者や期間が限られていることなど、限界があることも考慮に入れる必要があるのです。



04
section

子どものこころをよく見てみよう

弘前大学

不登校やいじめ、 子どもの自殺とこころの健康

不登校やいじめ、子どもの自殺などと、子どものこころの健康には関係があることは、誰もが知っています。特に子どものうつ症状(気分の落ち込み)は、不登校や自殺の予兆となることがわかっています。また、子どもの抑うつには、本人の特性、学校や家庭の環境が関係している可能性があります。

そこで弘前大学では、弘前市教育委員会と連携協定を結び、弘前市内公立小中学校の児童生徒とその保護者全数を対象に、子どものこころの状態を把握するための調査、「心のサポートアンケート」を始めることにしました。

こんな子どもが心配

調査の結果から、発達障がい特性が子どものこころの健康に影響を与えていることがわかりました。図は2016年度に保護者に対して自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder:以下ASD)、ADHDの特性について質問した結果を使って子どもたちをグループ分けし、それぞれの抑うつ症状の強さ(縦軸)を比較したものです。結果から考えると、**多動/衝動性以外の発達障がい特性は、抑うつ症状を強める要因となる可能性が高く、特性の重複はより高いリスクとなる**ことがわかります。

さらに同じ子どもたちを3年間継続的に調べてみると、こうした抑うつ症状には、友達関係の問題が大きく影響する(原因になりやすい)こと、ASD特性の高い子どもたち、中でも高学年の女子の方が、抑うつが悪化したり、悪化したまま維持されたりすることが多いことがわかってきました。

つまり子どもたちの抑うつ問題に対処するには、なるべく早く行うことが大切であり、特に友人関係問題の解決に焦点をあてた支援が重要です。また、発達特性のある子どもや女子は、それ以外の子どもに比べて抑うつを悪化させやすく治りにくいので、より配慮が必要です。

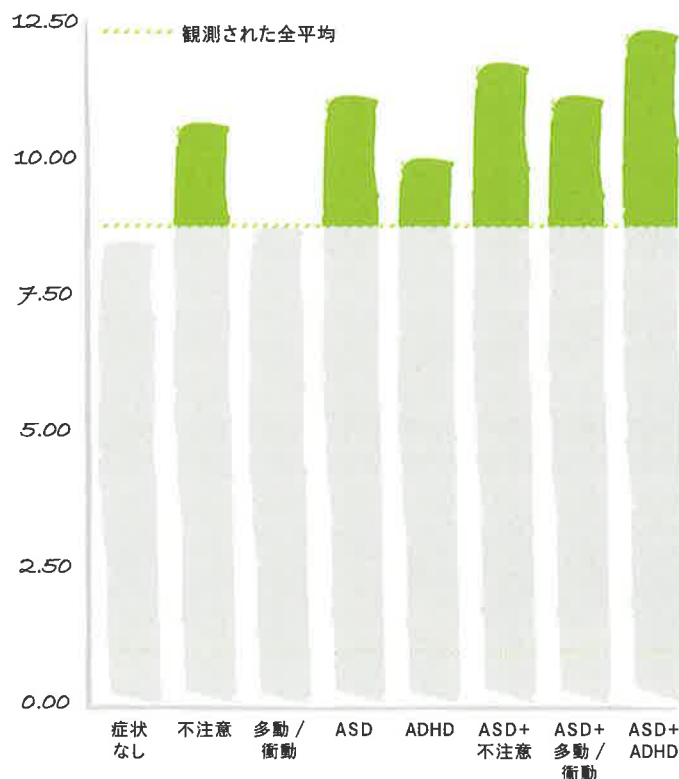


図 1: 発達障がい特性と抑うつ

子どものこころを把握 すると良いことが起こる

「心のサポートアンケート」は、子どもたち一人一人の心の状態を客観的に把握できることから、個別支援の資料になる可能性があります。

弘前大学では、各学校の子どもたちのこころの状態について、解析したフィードバックシートを作成し、各校にお返しすることになりました(図2)。

このシートによる効果などは明確になっていませんが、こうした取り組みを始めてから、弘前市の小学3年生以上の児童生徒の抑うつ得点は年々、低くなっています(図3)。

つまり、教師をはじめとする大人たちが、子どものこころの状態に関心を持つだけでも、結果的に子どものこころの健康状態に良い効果を及ぼす可能性が示されたと言えます。

【結果の見方】

～抑うつ・攻撃性・友人関係ストレス・学校ストレス・家庭ストレス～

[未評定]
○欠席・未実施のため、データなし ※-: 未実施(対象外)あるいは無回答

[抑うつ～家庭ストレス]
50を平均とする偏差値で表記 60以上=やや高い 70以上=高い

未評定	抑うつ	攻撃性	友人関係ストレス	学校ストレス	家庭ストレス	重要項目1	重要項目2
	42	46	41	42	45		
	61	48	64	49	61		★
○							
	46	42	70	33	39		★★★

児童生徒への個別返却シート内では、**【心の元気さ】**として逆得点で表示

児童生徒への個別返却シート内では、**【心のおだやかさ】**として逆得点で表示

※児童生徒へは上記2尺度のみを返却しています。
(小学1年生は【心の元気さ】のみ)

・60以上を黄色マーカー、70以上を赤マーカーで表示しています。「得点が高い=心配な状態」として読み取ることができます。
(58点・59点は全く心配ないということではないので、普段の様子とあわせて、1人ずつご確認ください。)
・各尺度の特徴や、基本的な対応方法はp4以降をご覧ください。

図2: クラスフィードバック

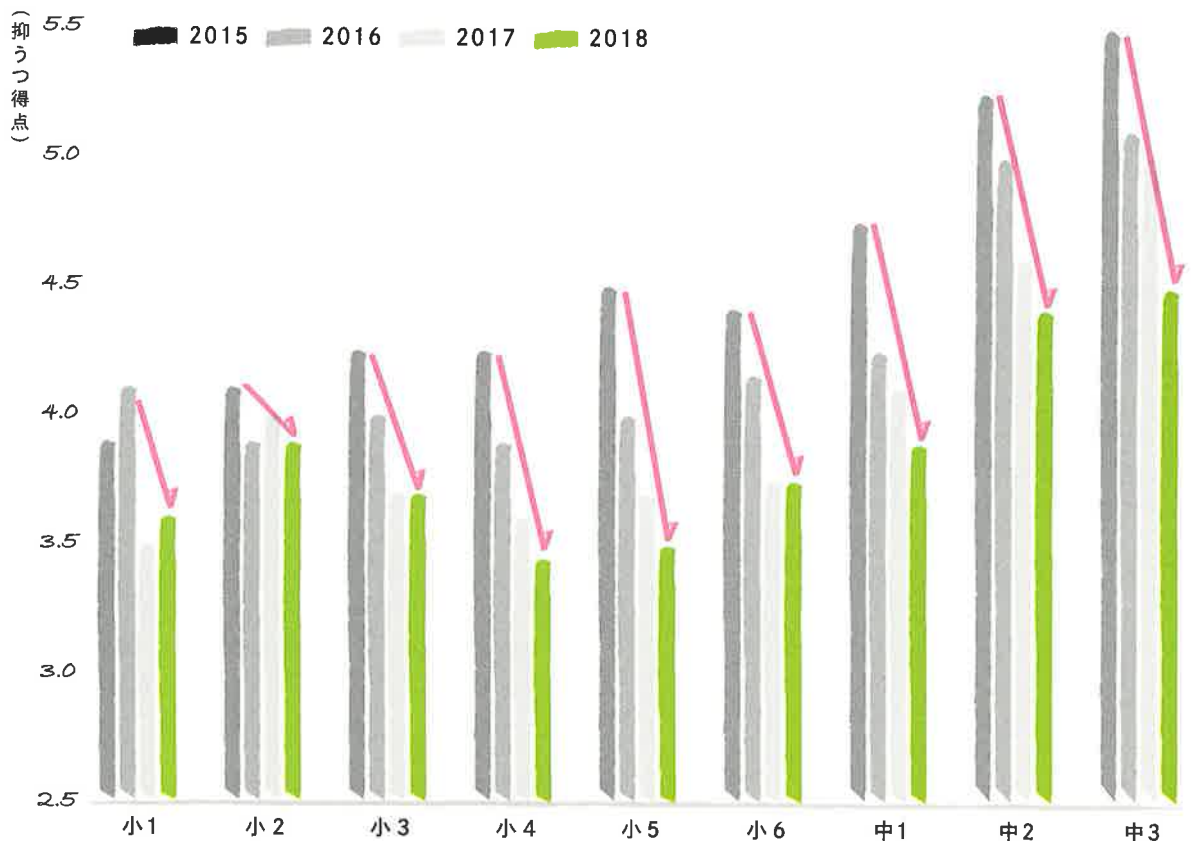


図3: 各年度、各学年の抑うつ

05
section

子どものこころを続けてみていく とわかってくることがある

中京大学

問題を予防する方法を見つける ためのコホート研究

不登校や非行、いじめ、自傷行為などといった子どもの発達を巡る課題となる行動について、予防が必要であると言われていますが、学校現場では、実際、何をすればいいのかわからないというのが現実ではないでしょうか。

この問題を解決する手段として、研究の場では、①子どもたちに何が起きているかという実態を知ること、②子どもたちを追跡して調査していくことで問題行動を予測する因子が何かを統計的に、科学的に見つけていくことが考えられます。そしてこうしたときに使われる研究をコホート研究(※)と言います。

中京大学では、大府市教育委員会との連携のもと、大府市に在住する全ての子どもを対象に、保育園入園後から中学生までコホート研究を実施してきました。

※コホート研究とは、「長期間にわたってその人々の特性や健康状態、生活習慣、環境などといった複数の要因との関係を調査する研究(片桐・辻井, 2015, p.26)」のこと。

不登校は勉強が 不得意な子に 起こりやすい?

大規模調査をしてみた結果、不登校(多欠席)は、学業成績が悪かったり学業ストレスを抱えていたりする子どもに多く起こることがわかりました。(図1)。このことから、「勉強の苦手な子が授業において少しでもわかる状態・理解できる時間を増やしていくことが不登校の最大の予防策になる」と言えそうです。

【学業面の問題】

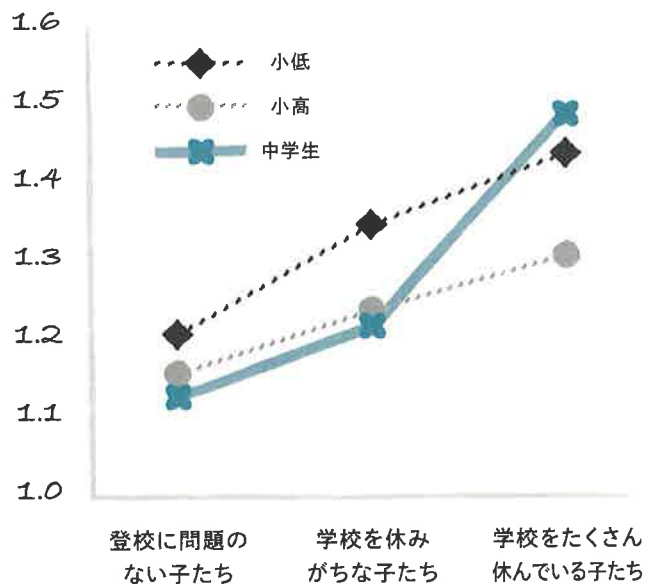


図1:「多欠席と学業・心身面・対人面の問題との関連(高柳ら, 2013)、より

縦軸が上であるほど、問題があることを意味します。
つまり欠席が多い子どもほど、学業面での問題を抱えていることがわかります。

抑うつ、攻撃性も不登校に関係がある？

図2を見てください。多欠席、不登校傾向と抑うつ気分が関連していることがわかります。また図3にあるように敵意、短気、身体的攻撃など、攻撃性も関連しているようです。

ところで、抑うつのある子どもは不快になり、それをイライラという形で表現することが多いことがわかっています。また抑うつは子どもにとって言葉にすることが難しく、「うざい」「むかつく」と言っ

たり、何らかの問題行動をしたりすることが多いようです。つまり抑うつと攻撃性は表裏一体なのです。

そうしたことから考えると、何らかの問題行動（つまり攻撃行動）を予防するには、情緒的に気になる子どもたちに対して、早め早めに大人から、「どう？」「最近、楽しくしている？」など積極的に声をかけることが大切だと言えそうです。

【抑うつの高さ】

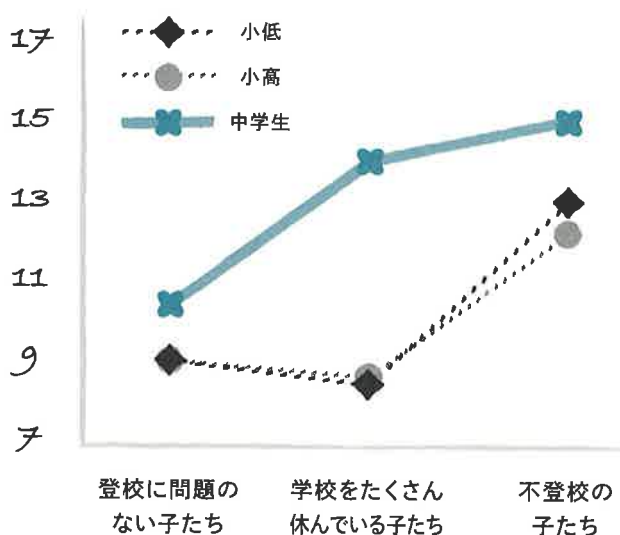


図2:「抑うつの高さ」

【攻撃性】

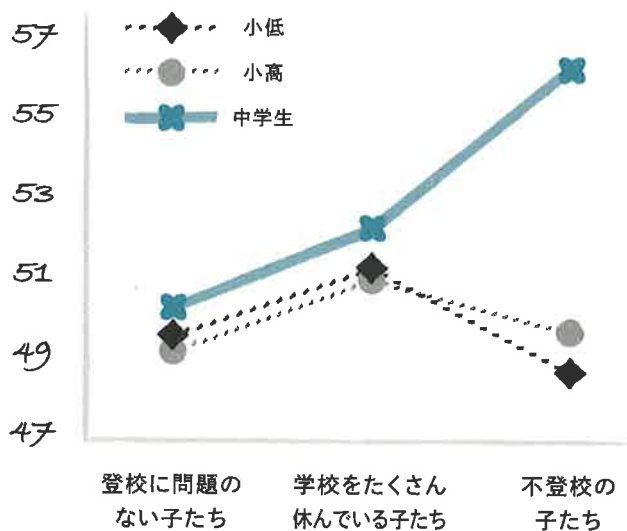


図3:「攻撃性」

ストレスマネジメント が大切

不登校の予防やメンタルヘルスを健全に保つために、ストレスマネジメントはとても大切です。

ストレスを感じたときに、反する傾向(嫌なことを何度も繰り返し考える)が強い子どもほど抑うつと攻撃性が高いこと、問題解決をしようとする傾向が高い子ども、気晴らしを行う子どもの方が、抑うつ傾向が低いということがわかってきました。

そうしたことから、子どもたちによりよいストレスマネジメントを行うことができるように教育していくことが大切だということがわかってきました。



図4:子どもの問題行動のメカニズム

※ 気晴らし行動とは…ストレスがかかったときに行う。音楽を聴く、散歩する、ゲームをするなど何らかの気晴らし目的とした行動。

子どもみんなプロジェクトの 可能性

このハンドブックを手にとられた方、どのように思われたでしょうか？
不登校、暴力行為など、子どもの発達上の課題について、科学的にアプローチすることに新鮮さを感じた方、こうした情報は使えるかもしれない、などと思ってくださったとしたら、それはこのプロジェクトの一つの成果と言えます。

今までとは違ったやり方に可能性を感じてくださったとしたら、それもまた大きな成果と言えます。

なぜなら、このプロジェクトの目的は、教育の現場に、科学を取り入れることであり、それはこれまで我が国において、あまりされてこなかったことだからです。

科学を使ったアプローチは、実を言うと、とても地道であり、時間が掛かるものです。科学的であろうとすればするほど、一つ一つのデータを精緻に扱い、小さな科学的事実を積み重ねることが必要だからです。

そのため、科学的アプローチに魔法のような成果を求めてはなりません。しかし、こうした取り組みから紡ぎ出された科学的事実、紛れもない事実であるからこそ、大きな力を持ち、様々な立場、状況を超えて共有することができます。

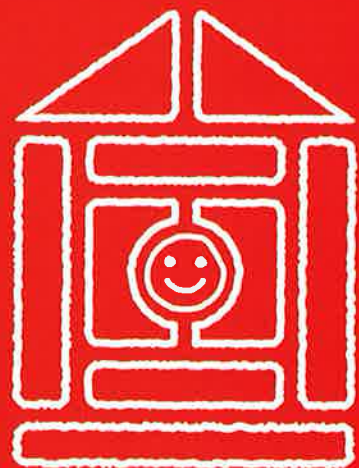
子どもみんなプロジェクトは、当初の計画であった5年間の取り組みを終えましたが、まだ教育現場に大きな変化をもたらすに至りません。その理由は、私たちが重視する科学の性質だと言えるのではないかと思います。

ただし、その種はまかれ、芽が出始めています。そのことは、このハンドブックを手に取り、いくつかの小さな成果を目にした方たちの中にある事実ではないでしょうか。

今回のプロジェクトは、教育現場と研究者の連携が豊かな成果を作り出す可能性を示唆しました。

これを次につなげ、いつか子どもたちの発達にかかわる問題の予防が実現し、多くの子どもたちの健全な発達と幸せな未来など、大きな実を結ぶことができると願っています。

最後になりましたが、取り組みを様々な形で支援していただいた、文部科学省初等中等教育局児童生徒課の皆様、地域教育委員会の皆様、そして弛むことなく皆を繋いでくださった子どもみんな事務局の皆様にご挨拶いたします。ありがとうございました。





- 和久田 学 (大阪大学 特任講師)
西村 倫子 (浜松医科大学 特任講師)
浦尾 悠子 (千葉大学 特任助教)
足立 匡基 (弘前大学 准教授)
明翫 光宜 (中京大学 准教授)
中里 匡志 (大阪大学 特任研究員)
藤岡 徹 (福井大学 准教授)
田中 早苗 (金沢大学 特任助教)
河合 優年 (武庫川女子大学 教授)
片山 泰一 (大阪大学 教授)

<編著> 子どもみんなプロジェクト事務局



公益社団法人
子どもの発達科学研究所

住所：浜松市中区中央 1-3-6-201